

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：24302
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2013～2015
 課題番号：25511007
 研究課題名(和文) 明治時代の京都を訪れたイギリス人の京都観とその思想的背景に関する比較文化研究

 研究課題名(英文) A Cultural Study of British Tourists' Views of Kyoto and Their Ideological Backgrounds, Focusing on Meiji Period

 研究代表者
 野口 祐子 (NOGUCHI, Yuko)

 京都府立大学・文学部・教授

 研究者番号：80128769

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)： 明治時代の京都を訪れたイギリス人の旅行記や雑誌記事、絵画・写真等の図像は、当時の京都を知る上で貴重な資料だが、本研究はそれらと京都から発信された資料を用いて、イギリス人が形成した京都観に影響を与えた諸要素をも明らかにすることを目的とした。
 イギリスでの調査で、京都訪問に言及する多くの旅行記の存在を明らかにした。京都の伝統文化と近代化・観光地・神社仏閣・文化財・工芸品・演劇等への、イギリス人の肯定的/否定的評価とその変化を分析することによって、そこに彼ら自身の文明観・都市観・宗教観と時代のイデオロギーが明確に或いは暗示的に投影されていることを明らかにし、京都学に国際的視点を加えることができた。

研究成果の概要(英文)： The travel writings and articles on Kyoto, with their pictures and photos, produced by British tourists in Meiji period, are valuable resources for knowing Kyoto of the time, but this study takes them up to analyze also those elements which influenced their views of Kyoto.
 One of the contributions this study made is the digging up of a number of travel writings by unknown British tourists referring to Kyoto. By reading into those writings we revealed the reasons why they longed for Japanese traditional ways of life which they sought in Kyoto, or why they criticized certain aspects of Kyoto. Although some of the tourists showed insightful observation, their views of civilization, the city, and religion, as well as the ideology of the day, often influenced their experience of Kyoto, including sightseeing, visiting of famous temples and shrines, shopping, appreciation of arts and crafts, and theaters.

研究分野：比較言語文化

キーワード：比較文化 カルチュラル・スタディーズ 国際京都学 京都イメージ イギリス文化

1. 研究開始当初の背景

(1) 明治時代の京都を訪れたイギリス人の旅行記や雑誌記事、スケッチ・絵画・写真等の図像は当時の京都を知る上で貴重な資料であるが、本研究はそれらを研究対象として、彼らが形成した京都観と、その形成に影響を与えた諸要素を明らかにする、カルチュラル・スタディーズのアプローチを用いた研究としてスタートした。明治時代の日本を訪れた欧米人に注目する先行研究は充実しているが、当時最大の国際的影響力を誇ったイギリスと、彼らの訪問地としての京都を研究対象として特化することによって、相互の影響関係がより鮮明に見えてくるという想定のもと、本研究を国際京都学の一端を担う研究として位置付けた。

(2) イギリス・比較言語文化を専門とする研究代表者は、すでに京都の都市イメージに関する研究を、文学・景観・自然観・メディアを切り口に、ヨーロッパ首都と比較する共同研究として組織してきた。また研究代表者は平成20年度から毎年、講義科目「欧米から見た京都」を担当し、海外から京都へ向けられてきた古今の多様なまなざしについて分析してきたが、講義で取り上げた数多くのテキストが、現在の京都を理解する上で非常に有効であることが分かった。以上の比較研究の蓄積を踏まえて、本研究では、明治時代に京都を訪れたイギリス人によって発せられた京都に関する言説・図像等を中心に、同時期の京都から発せられた言説・図像等とも比較しながら、テキストの批判的研究を行うこととした。

2. 研究の目的

これまでの学際的研究の成果を踏まえて、イギリス人と京都との接触が生み出したテキストのいっそう精緻な分析を中心とする研究を行うことにより、彼らが形成した京都イメージの生成・受容・流布・変容に関する研究

を深化させることを目指した。明治時代の日本を訪れたイギリス人の京都観には、日本への憧れと共に、彼らの文明観、都市観・宗教観と時代のイデオロギーが明確に或いは暗示的に投影されたはずであり、京都に彼らが何を期待し、何を肯定的/否定的に評価したかを明らかにすることによって、欧米社会での日本文化受容とその変化の過程を歴史的に把握できる。同時に、近代化を急ぐ当時の京都が、欧米からの期待にどのように応えたか、あるいは失望させたか、そして近代化と同時に古都イメージを創出していく「まなざしの内面化」がどのように進んだかについても解明することによって、京都学に国際的視点を加えることを目指した。

3. 研究の方法

研究代表者・研究分担者(2名)が協力して、資料の収集・調査を実施した。研究代表者と研究分担者が毎年イギリス(大英図書館他)において文献調査を行い、京都に関する旅行記・雑誌記事等の発掘・収集に努めた。それらのテキストに表れたイギリス人の京都へのまなざしを5つのテーマ(伝統文化と近代化・景観・産業・美意識・演劇)に分けて分析した。研究代表者と分担者がテキストの分析と検討すべき観点の抽出を行い、毎年その成果を論文に発表した。最終年度には本課題の成果の一部を公表する公開シンポジウムを開催すべく、新たに明治時代の輸出工芸に造詣の深い研究者と交流し、観点の抽出と分析の深化に努めた。

4. 研究成果

(1) 研究活動の成果として特筆すべきは、京都訪問に言及する多くのイギリス人による旅行記の存在かを明らかにしたことである。これは主に、イギリスにおいて精力的に資料調査を行った研究分担者長谷川雅世の功績である。また研究協力者(1名)の協力を得て、論文執筆のために京都府立総合資料館資料の

調査を行った。研究代表者・研究分担者が論文7点を発表し、3年間の成果の一部を発表する公開シンポジウムを開催(平成27年12月19日)、日本語と一部英語による冊子体の成果報告書を作成し、関係研究機関、研究者、京都府内の公共図書館に送付した(平成28年3月末)。

(2)研究内容の成果として、明治時代の京都を訪れたイギリス人の京都観に、日本への憧れと共に、彼らの文明観、都市観・宗教観と時代のイデオロギーが明確に或いは暗示的に投影されていることを明らかにした。イギリス人旅行者が京都の伝統文化と近代化・観光地・神社仏閣・文化財・工芸品・演劇等に期待したこと、肯定的/否定的に評価したことを明らかにすることによって、日本文化受容の一端を歴史的に把握するとともに、京都学に国際的視点を加えることができた。旅行記や図像の解読によって、京都が単にエキゾチックな文化を体現する場と見なされたわけではなく、日本の伝統文化を保存すべき場であると同時に、ヨーロッパ世界がすでに喪失した世界を体現する場とみなされたことを明らかにした。多くのテキストが、日本の伝統文化がほどなく喪失に向かうことへの嘆きに満ちていることもわかった。観光地の体験のしかたが非常に画一的であったこと、京都の近代化とともに変化していった様子も明らかにできた。観光地へのまなざしとしては、宇治への評価を例に、今日言われる「文化的景観」を体験したことが高い評価として表れていることを明らかにした。これは現代の観光にも参考になる視点である。神社仏閣の評価については、個々のイギリス人の宗教的背景が評価に影響したことが明らかになった。文化財という観点については、日本に文化財という意識がまだ行き渡っていなかった時代に京都を訪れたイギリス人は、彼らが文化財とみなす京都の歴史的建造物の劣悪な保存状態へ厳しい評価を下したが、その背景には、当時の

イギリス自体の危機感、すなわち急速に産業社会化が進み古物が失われていく時代における文化財保存の必要性に関する考え方が現れていることを明らかにした。工芸品については、イギリス関係と京都関係の資料を比較して、欧米からの需要と、それに応える京都からの供給の間に齟齬が生まれる経緯、例えば京都の輸出用工芸品が、ジャポニズムの流行に乗って大量消費された後、短期間のうちに衰微していった経緯なども明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

1長谷川雅世、明治京都でイギリス人旅行者たちが求めたコト・モノ—『京都日出新聞』の「外人と京都」をてがかりに—、高知大学教育学部研究報告、査読無、第76号、2016、pp. 233-243.

2佐々木昇二、幕末・明治期における日英の演劇文化接触、コルヌコピア、京都府立大学英文学会誌、査読有、第26号、2016、pp. 39-59.

3野口祐子、欧米からの旅行者が体験した明治時代の宇治—文化的景観という観点、京都府立大学学術報告 人文、査読無、第67号、2015、pp. 115-129、<http://id.nii.ac.jp/1122/00000088/>

4長谷川雅世、明治時代の京都でのイギリス人旅行者の神社仏閣めぐり—イギリス人の旅行記に描かれた京都の特別な寺々、高知大学教育学部研究報告、査読無、第75号、2015、pp. 191-202、<http://hdl.handle.net/10126/5522>

5長谷川雅世、明治時代のイギリス人旅行者たちが描いた「昔ながらの日本」と「神社仏閣の都市」としての京都—敬虔なキリスト教徒の目に映った「宗教都市」京都の姿、コルヌコピア、京都府立大学英文学会誌、査読有、第25号、2015、pp. 21-42.

6野口祐子、明治時代の英語ガイドブックにおける京都へのまなざし—「文化財」という観点、京都府立大学学術報告 人文、査読無、第66号、2014、pp. 131-141、<http://id.nii.ac.jp/1122/00000043/>

7野口祐子、明治時代の京都を訪れたイギリス人の工芸と室内装飾に対する反応とその思想的背景に関する研究、京都府立大学学術報告 人文、査読無、第65号、2013、pp. 63-77.

〔その他〕

1野口祐子（編）研究成果報告書「明治時代の京都を訪れたイギリス人の京都観とその思想的背景に関する比較文化研究」、査読無、2016、pp. 1-216.

6．研究組織

(1)研究代表者

野口 祐子 (NOGUCHI, Yuko)
京都府立大学・文学部・教授
研究者番号：80128769

(2)研究分担者

長谷川 雅世 (HASEGAWA, Masayo)
高知大学・人文社会・教育科学系・講師
研究者番号：30423867

佐々木 昇二 (SASAKI, Shoji)
京都府立大学・文学部・教授
研究者番号：30135496